

研究ノート

道路愛護と戦前の小学生
—山形県東田川郡黒川尋常高等小学校
『道路愛護文集』(昭和 11 年発行)を中心に—

小林 丈一

はじめに

私の研究課題であるまちづくりの一環として、市民の生活と道路・街路樹のことを調べているうちに、かつての山形県東田川郡黒川村（その後、櫛引町を経て、現在は鶴岡市）において、戦前、小学生が道路や森林を自分たちの問題として考え、作文にまとめる機会をもっていたことを知った。同時に、黒川の小学生や青年たちに、「公益」という用語が比較的日常的に使用されていたことも、当時の資料を通して知ることができた。

周知のように、黒川村は、黒川能、伊勢参宮を目的とした伊勢講、難所を切り開いた堰・用水路などでよく知られている。とりわけ黒川能は、約 500 年の歴史をもち、国の重要無形民俗文化財になっている。伝統芸能では、一級品の評価が定着している。

道路や、そこに植栽される街路樹の美化を伴う拡充は、持家づくりを超える現代のまちづくりには欠かせないものである。しかし、第二次世界大戦前はもちろん、大戦後も長い間、道路も街路樹もまちづくりにあっては大きな関心を集めたり、重要な位置を与えられたりするまでにはいたらなかった。道路は、機能性や利便性が重視されがちで、より良い暮らし、安全、景観の側面と意識して結びつられることは遅れた。街路樹の美化・拡充はさらに遅れて、長い間二義的な扱いにとどまった。

しかるに、黒川村では、小学生がたとえきっかけは行政や教員による上からの指導・勧奨であったとしても、戦前に道路や森林について自らの問題として受け止め、考える機会をもっていた。昭和 11（1936）年に発行された文集『道路愛護文集』『愛林の綴り方』に記録されていることが、そのことを適切に教

えてくれる。これらの資料は、従来入手はもちろん、見ることもまったく不可能であった。実物の所蔵が公の図書館、資料館、学校では確認されていなかったからである。最近になって、ようやくこれらの現物を私は手にすることができた。これまで確認できたものは、旧黒川小学校の校長室から見つかったものと、ある個人が所蔵しているもの、この二点のみである。

これらの道路や森林に関する小学生の文集の存在は、戦前昭和という時代を考えると、私にとっては一種の驚きであった。学習活動としてであれ、また実践としてであれ、道路や森林に真正面から取り組んでいること、しかもそれを記録にも残していることは、極めて異例のことである。これらの先駆的ともいえる活動と、その記録を埋もれたままにしておくのは、何とも残念なことである。それらを可能な限り調べ上げ、現在に継承し、さらには後世に伝える責任を果たす必要があると考えた。

今回は、このうち『道路愛護文集』に焦点をあてつつ、小学生と道路や森林に関する戦前の関わりや動向を、一時期のものではあるが、紹介させていただくことにする。

1. 戦前の道路文集の発掘と再評価

「道路の恩を知れ」「道路に感謝を捧げよう」「新道は汗の賜」「道路一本萬人の為」「我等の道路我等で愛せ」「道路修繕部落の親和」「道路よい村栄える村」「道路愛護はお互いの為」

これらの標語やタイトルは、戦前、山形県東田川郡黒川尋常高等小学校（以下、黒川小学校）に通っていた児童たちが作文として書いたもので、昭和11（1936）年に黒川小学校が発行した『道路愛護文集』に収められたものである。

この文集は、今は鶴岡市立櫛引東小学校となっている旧黒川小学校などには所蔵・保管されていない。漸く探り当てたのが、鶴岡市郷土資料館の秋保良氏のご厚意で中に入れていただいた同資料館の仮書庫である。同郷土資料館には、昭和10（1935）年前後に黒川小学校に勤務していた佐藤凜太¹氏が所蔵していた資料が保管してあった。その中には、『仰げ軍旗』『我等の放送局』『紫明』『黒川学園叢書』、青年団が発行した『鹿苑』などが保管されてあった。現在、『道

『路愛護文集』は、この鶴岡市郷土資料館の一冊と個人蔵の一冊とあわせ、二冊しかその存在が確認されていない。

黒川小学校では、昭和の初め頃から、読み方・作文を重視した。綴り方運動の影響もあったであろうが、全国的な綴り方運動とは一応独自に、教員たちは作文熱といえるほど熱心な取り組みをみせた。その結実が、昭和11年に集中してみられたのであった。

昭和10年代初頭に、道路の愛護を課題として小学生が作文に取り組んだことは、大いに興味を引く。時代が時代であるとはいえ、時代の潮流を超えて、小学生に道路のことを自分たちの生活のなかで考えさせることになった。ふだんは、子どもにとって道路は身近すぎて、その役割などを殊更意識することもなかったはずである。それに対して、上から与えるという形であれ道路を作文のテーマとすることで、小学生ながら道路に直接立ち向かって、その意味や役割を考えることになったものである。

しかも道路に注意を向けて観察させるだけでなく、各自の考えをまとめるべく作文に書かせ、それを文集として記録したのである。そのことが今日のまちづくりの時代にまで当時の文集活動を生き延びさせ、引き継がせることになった。その結果、今から70年余前の作文と文集が、生活やまちづくりに本格的に取り組む時代に入った現在に至り、先駆的足跡として見直され、歴史的な意義が再評価されるに至ったのである。

黒川小学校では、昭和の初期から作文活動が盛んであった。その頃から、生徒による作文部が組織されていた。作文部が中心になって、全校生徒が作文に参加、出来上がると、国などの作文コンテストに応募もした。そのうちの数作品が全国で優良賞を受賞している。受賞作を含め、執筆した生徒全員の作文がまとめられ、文集として公表された。

とくに昭和11年には、生徒は多くの課題にとりくみ、それらは先生の指導と作文部の手で文集にまとめられた。そのことについては、当時の文集にも、「教科研究ハ本年度ハ主力ヲ読方科ニオキ（中略）各種ノ文集ヲ発行シ優良作品ヲ夫々応募提出シ何レモ優良賞ヲ獲得セルハ喜ブベキコトナリ」²と記録されている通りである。

現代では、住みよい環境や、より良い暮らしをつくりあげていくには、道路

の整備、それも生活のやすらぎや景観も考える道路の整備が柱になる。ところが、今から70年ほど前の東北の農村では、ほとんどの農民・住民は、より良い暮らしづくり、その一部としての道路の整備とは無縁であった。にもかかわらず、小学生は様々な視点で道路を捉え、道路愛護の観点から作文を書いていた。そこには、まちづくりなどという用語はまだ使用されてはいなかったにしろ、現代のまちづくりの先駆けをなす一面をくみとれる。その点では、まさに先駆的な足跡であり、忘れてはならない取り組みであったのである。

2. 黒川小学校児童の文集と『道路愛護文集』

黒川小学校の『道路愛護文集』は、昭和11（1936）年9月の刊行である。その発行は、道路法の導入に寄与するなど、道路政策に大きな役割を演じ、当時は内務省内にあった道路改良会（現在の日本道路協会）が、道路に関する作文や標語を募集したのに対応したことが契機であった。道路愛護の課題に応募した21名の生徒の綴った作文を集めた「懸賞応募」文集なのである。

昭和11年6月、道路改良会は、道路の改良と愛護に関する実話と標語について、小学児童の部と一般の部で募集することを機関誌『道路の改良』に公示した。同時に、内務省各土木出張所長、各府県知事、全国市町村長へ依頼して、各管内と小学校へ募集趣意書を配布した。その結果、国内の各府県からはもちろんのこと、当時の朝鮮、台湾、関東州、満州国、中華民国などからも多数の応募があった。その数は、小学児童で実話が164通、標語が986通であり、一般では実話が421通、標語が10,520通にもものぼった³。

文集に掲載された21点の標題は、一部を冒頭で紹介したが、生徒が選んだ標題は、「道」が2名、「道を大切にしませう」が8名、「道路愛護」が4名、「道を愛してお互いにまもりましょう」「我等の道路を愛しませう」「道路を愛する心」「愛せよ道路」「吾等の道路」が各1名、無題が2名。尋常小学校2年から6年まで、各学年3名ないしは4名で計17名、高等科1年から3年まで4名、総計21名である。

本文の冒頭で挙げた標語や文集に収めてある作文の内容をみると、児童たちの道路の受けとめ方や捉え方が、時代背景を通して大きく三つに集約できよう。

①改良され、村の近代化の先端を行くという認識でみる道路、②村の発展や村民の暮らしにとって有益な道路、さらに③協働してつくる道路、の三つである。

まず第一は、近代道路への変貌。それが村にあっては、近代化の先頭を行く位置づけから書いているものである。黒川は農山村で、当時の主な産業は農業と薪炭業であり、道路づくりは遅れた地域だった。それでも、昭和11年頃は、以前に比べて行政も力を入れたし、村の歴史ではかつてないほど良い道路になってきた。文集には、村から村まで道路が真っ直ぐになったことや、平らになったことなど道路の改善・改良に目を向けて居るものが目だつのである。

現在、歩行者は道路の右側通行であるが、当時の警察官が登校中の児童に、道路の左側を通るように指導している様子も綴られている。さらに、歩く時には自動車や自転車の邪魔にならないように注意を促しており、近代道路が整備された時から人間は交通上で弱い立場であったことが、生徒たちにも何となく分かる状況だったのである。当時から、歩行者が第一優先のドイツなどヨーロッパ諸国とは逆の扱いである。

第二は、村の発展や村民の暮らしにとって有益な道路という目でみるものである。そういった認識をよく表している尋常6年生男児の一文を紹介する。「米・炭・野菜等の農産物を運ぶはいふ迄もなく、馬車、自動車、自転車の道として、交通上からもこの道路は真に必要なものであり大切なものであって、若し道路がなかったら私達人間は生活して行く事も難しいと思ひます」⁴。このほかに、道路は私達の生命であるとまで記しているものもある。また、農村の振興、暮らしの向上には、どうしても道路の整備が必要なので、山の中まで道を整備して便利にしていかなければならないことを訴える文もある。

子ども自身の毎日にとっても、もしこの道がなくなったら、どうやって学校へ行くのかという目でみているものもある。尋常6年生女児の一文には「昔の狼や猪の居つた道を県道に編入するまでの先祖の苦心を考へこんな立派な道路を通学出来る事を思ふと、一日も欠席などしては居られない。一生懸命に勉強をしなければならぬと思ひます。そうしてつまらないものを道路にすてたり、砂利一つでも粗末にしたりする事は絶対にやめなければなりません。道路を愛護し、又常に勉強を怠らなかつたら、苦心して道路改善につくして下さつた人びとに対し幾分恩をかへすことにもなると思つて勉強にはげんで居ります」と

ある。この文章からは、吸殻拾い・ゴミ拾いを全員参加のまちづくりの第一歩とする現在のまちづくりにも通じる認識がうかがえる。

第三は、協働してつくる道路とその普請について関心を向ける認識である。道路は、自分のものではなく、みんなのものであるという意識から、現代でいう協働のまちづくりの視点で道路づくりを見ている内容のものが他にもいくつかある。

学校では学年の上の生徒は、道普請に参加する。道路は、子どもを含め、村の人たちみんなでこしらえた。大人ばかりでこしらえるのではなく、小学生なりに、自分たちも、小さな出来ることからこしらえていかなければならない。道路を立派にして、便利にするのは私達にとっても務めであるという姿勢である。

運搬車で、みんなで川から石を持ってきた様子を表した文もある。以前は、道路がひどく損傷している箇所があったが、このころは道路を愛する心が強くなったので壊れ方も少なくなったという。

心から、道路清掃も立派にしようという子どもらしい訴えもある。村では、生徒たちも時々道路清掃をやって協力し、便宜・便利をはかったり、誠意をこめて、自分から進んで行なったならば、いつでも気持ちよく道路を通れると、数年前から、改善と愛護の精神を以って、各部落少年隊、青年団、村民一致団結のもと、道路の改善と愛護に務めたりもした。

兄貴分の青年団は、その活動でしばしば県の表彰を受けた。また、この年に黒川村の宝谷集落が、知事から表彰された。そんなことを取りあげ、村の名誉であるという内容の作文もある。

『道路愛護文集』には、殊更街路樹についての記載はみられない。文集が発行された昭和11年当時の黒川は、まだ道路そのものの敷設や舗装、さらには近代化が不十分で、何よりも生活道路を充実させることが優先された。街路樹まで意識がすすまなかったのである。ただし、森林・愛林に関する作文では、「黒川は、林があるので仕合せです」とか、「我が村は木の良く育ち、又美しく平和なよい村です」などの記述が目立ち、当時の小学生でも、良い村、良い暮らしと森林を結びつける生徒がいたことをうかがわせる。しかし、街路樹の整備・拡充といった発想には、いたっていなかったのである。

『道路愛護文集』は、全校文集の第1号『揚げ軍旗』に続く第2号という位置づけになる。この文集のなかから、優秀文として3人がそれぞれ一等、二等、三等の賞を受けている。

当時の記録⁵にもあるように、道路改良会の審査は、慎重徹底を期したために予想外に日数を費やし発表が延期になった。その徹底ぶりは、実話として記述された文章が応募作文にあれば、その事実の有無を調査するほどであった。次に、その内容が真に募集の趣旨に適合して、よく道路改良の効果を表現しているか否か、また愛護思想の普及に効果があるか否かに重点を置いた。それに併せて、文芸上の見地から最終的に審査を遂げた。その結果の受賞であったのである。

黒川小学校が昭和11年度に発行した文集は、『道路愛護文集』のほかに、以下のものが挙げられる。

『揚げ軍旗』	山形自由新聞社	一等受賞（全校文集の第1号）
『我等の放送局』	山形自由新聞社	五等受賞（同第3号）
『愛林の綴方』	山形県山林自治会	二等受賞
『納税の文集』	黒川村役場	
『たらちね』	地久節奉祝記念発行	

その他、次にみるように学級文集にあたる『紫明』が作文部の手で刊行されている。

3. 黒川小学校作文部機関紙『紫明』のこと

生徒の文集

『紫明』は、黒川小学校作文部の機関誌である。はやくも昭和4（1929）年に創刊され、以後ほぼ毎年発行された。「山紫に水明らかなる」という意味から、文集が『紫明』と名づけられた。作文部の機関誌とはいえ、部員のみの機関誌ではなく、生徒全員に執筆の機会を与えた。部員は、機関誌の編集・刊行の世話役となった。

この『紫明』は、旧黒川小学校校長室に、古くから保存されていた多くの資料の束の中に眠っていた。私は、近藤直志校長先生のご厚意でその古い資料の束を調べることをお許しいただいた。有り難いことに、その中に『紫明』が全

揃いではないが、かなりの数含まれていたのである。

この『紫明』を抛りどころに、黒川小学校は、全生徒に身の回りのことを自由なテーマで作文に書かせ続けた。そのうちのいくつかが、毎年『紫明』に掲載されたのである。

入手した数号の『紫明』の中で、『道路愛護文集』以前のものには、村の様子を紹介する上で道路を記述した文はあるものの、もっぱら道路に焦点をあてて書かれた作文はない。ただ、道路沿いに植樹されているサクラの木に関するような作文はある。例えば、5年生の女子生徒の作文は、自分がサクラの木の立場になって読者に訴える内容である。内容は、どんなに寒い夜でも立っていなければならない、春にはサクラの花を咲かせるのに、みんな根を踏んだり枝を折ったりする。私は、きれいな花を咲かせてみんなを大切にするので、みんなも私を大切にしてくださいという趣旨のものなどである。

このようなことを考えると、ふだん生徒たちの意識思考にはまだ明確にのぼりにくかった道路について、上からの指導とはいえ、生徒に考えさせ作文にさせたこと、そしてそれらが『道路愛護文集』に記録され、残されたことは、非常に貴重なことである。

教員も文集を発行

黒川小学校では、作文熱をリードしたのは教員であった。生徒たちも、そのことをよく理解していて「私共の熱誠こめた作文や詩や歌や俳句などがのせられました。(中略)級訓のように(中略)私共の学業にいそしみはげませう」⁶という前向きな反応を見せている。

昭和10(1935)年度を見ても、『黒川学園叢書』を教員が中心となって綴り続けた。昭和10年4月から翌年3月までの1年間で14冊発行され、7月と9月は月に2回発行している。各冊約200～300頁前後にも達する分厚いもので、その意気込み・熱意がよくうかがえる。創刊号の巻頭言では「六月以降は毎月二回発行の予定」と述べていたので、発刊当初はとくに大きな力の入れようだったことがうかがえる。

『黒川学園叢書』は、黒川小学校に関する全てを記録として残すことがねらいであった。内容は、研究調査の発表、参観旅行の記事、講習講演の要項と感

想、読書の雑感、随筆、偶感、和歌俳句、短詩短文、狂句、漢詩など多岐に渡った。昭和10年12月から黒川小学校の佐藤凛太氏も、教員一同は「叢書を中心として終始一貫本学年間を通して来た」⁷と記しているほど、昭和10年度の中心的な事業であった。

この教員による文集活動の延長で、前述のように昭和11年度に黒川小学校の生徒たちは、多くの文集を綴り、そのうち、いくつかの作品が全国的な優良賞も受賞した。その背景としては、指導役の教員自らが文章を書く努力を続けていたこと、そして生徒用にも『紫明』を発行して、機関誌などに掲載される喜びを子どもながらに味わえるよう生徒たちを指導していたことの二点を忘れてはならない。そういった努力の蓄積が昭和10年代に花開くのである。

4. 黒川村と「公益」

黒川の子供たちの作文に、「公益」という文字が見られる。文集を読んでいくと、二人の小学生が公益の文字をさりげなく、普通に使っているのである。

例えば、簡易保険の普及によって「此のお金が、日本の国の公益やその外国家事業に働いてゐるとのことです」とか、やはり簡易保険に関する作文で、集められたお金は「(前略)公設託児所(中略)、隣保共同事業、公益市場等の施設費として貸し出すのであります」といった具合である(いずれも『紫明』に掲載された作文)。教えられてわざわざ使ったというより、普通の姿勢で普段使うような気持ちで使っているのである。そこに公益の文字が、当時は小学生レベルの子供たちにも広まっていたことがうかがえる。

ちなみに、黒川の青年団の記録(準則に基づいて作成された目的や事業)にも、公益の文字の使用をみることができる。そこにも、公益の日常化・一般化がうかがえるであろう。黒川村の青年団は、大正13(1924)年に組織された。黒川村に住み、小学校教育を終えるか、あるいは学齢を超えると入団できた。

その団員について、満20歳未満を少年組、満20歳以上を青年組とした。青年団の統一を図るため行政区割りごとに黒川、松根、宝谷、たらのき代、田代、馬渡の6支部を設置した。もともと、この支部にあたる集落単位で青年団が組織されており、これが地域青年団の基礎単位・原型となっている。拡大広域組

織となるとともに、各単位青年団は支部となったのである。

青年団は、発足した年の9月に『鹿苑』という会報（菊判雑誌型）を創刊した。ただし第4号までは4年に一度、それ以降は毎年発行された。昭和7(1932)年に発行された第3号からは、女子青年団も組織され、活動報告に加わっている。

青年団はその目的を達成するために、4つの事業、つまり（1）知徳修養、（2）体育娯楽、（3）産業及び経済（「各種の共同作業」など）、そして（4）公益の4方面の事業を掲げた。そのうち、「公益に関スル方面」については、①「小学児童出席奨励」、②「納税成績ノ向上ニ対スル共助」、③「道路修理、道標ノ設置」、④「風紀ノ肅正、敬神思想ノ鼓吹」、⑤「神社境内ノ掃除及祭典ノ補助」を掲げている。ここでも、道路への取り組みを公益に加えていることが興味をひく。実際に、公益活動のうち道路については、社会部が担当し、道路修理、道標設置、橋の雪止めなどを行なっている。

5. 黒川小学校の作文への取り組みの意義

黒川小学校は、昭和初年から読み方・作文に力を入れていたが、その成果が実るように、昭和10年代初頭にその頂点がやってきた。数々の賞も受賞した。それだけに、その頃の作文活動には熱気のようなものが感じられる。その先頭に立っていたのは教員グループである。

しかし、教員たちは、自らの活動にとどまらず、生徒をも巻き込み、しかもレベルの高い活動に押し上げることに成功した。その成果が多くの文集であった。そのなかで、本稿で取り上げた『道路愛護文集』や『愛林の綴方』のいくつかは、全国的な賞を獲得し、また、まちづくり・地域づくりの視点から、現在に生きる重要な位置を占めている。

黒川小学校の活動が今日のみからみても重要という意味は、「愛護」という言葉が漸く使用されるようになる時期、つまり太平洋戦争勃発以前の時期に、身近にありながら、ふだんの生活では忘れられている道路の役割・恩恵に子供たちの目を向けさせ、しかも愛護の視点から道路に関する作文を綴らせたことが、まちづくり・生活づくりの視点からみれば、先駆的で注目をしてよいことだからである。

たしかに第一次世界大戦を機に、道路改良会が設置され、道路法が制定された。また、昭和初年頃から経済不況下に、全国的に失業対策の意味もあって、道路整備は生活との関連でも政策的に重視された。さらに準戦時から、本格的な戦時に向かおうとする時には、道路整備は、軍事上も必要とされ、かつてなく重視される。しかし、なお鉄道優位は変わらなかった。庄内地方も同様に、陸羽西線が大正 3（1914）年、羽越本線が大正 13（1924）年に開通している。以来、庄内地方の交通体系も、鉄道を中心として形成されてきた。

そんななかで、あえて道路を作文の課題にすることによって、子供たちに子供なりの視界の中で初めて道路を本格的に考えさせたのである。

そういった活動は、長い間まったく忘れられていた。それらの活動を記録した機関誌や文集が、『黒川学校の百年』（櫛引東小学校、昭和 49 年）などによって名前程度は知られていたものの、前述の通り実物がまったく確認されていなかったからである。

この度、旧黒川小学校の近藤直志校長先生はじめ先生方、また鶴岡市郷土資料館の秋保良氏はじめ皆様のご厚意・ご協力で、思いがけずそれらの資料のすべてではないが、かなりのものを発掘することができた。そこには、今日のみでみても、まちづくり、教育・人づくりなどいろいろのことで、多くの素材が散りばめられている。本稿が成り立った所以でもある。

今回は、多くの方々にお世話になった。仮書庫に入れていただくなど、随分無理も聞き入れていただいた。そういった中、鶴岡市役所櫛引庁舎総務課、同建設環境課、鶴岡市立図書館、同櫛引分館、鶴岡市立郷土資料館、鶴岡市教育委員会、山形県鶴岡市立櫛引東小学校、同西小学校などの方々、それに小松隆二東北公益文科大学教授には心から御礼を申し上げたい。

脚 注

- 1 黒川小学校の赴任期間は不明であるが、昭和 10 年 12 月から 4 ヶ月間、馬渡冬季臨時分教場にて勤務していた。山形県東田川郡黒川尋常高等小学校、黒川村青年学校『黒川学園叢書 14 号』昭和 11 年 3 月、p.59 参照
- 2 『黒川学校の百年』櫛引町立櫛引東小学校創立百周年記念、昭和 49 年、

昭和 11 年の項を参照、当時の教授及び訓練について記載されている。

- 3 『道路の改良（第 18 巻第 12 号）』道路改良会、1936 年、p.95
- 4 『道路愛護文集』山形県東田川郡黒川尋常高等小学校、昭和 11 年、p.22
- 5 前掲書 3 に同じ
- 6 『紫明（第 7 号）』山形県東田川郡黒川尋常高等小学校、昭和 10 年、p.6
- 7 山形県東田川郡黒川尋常高等小学校、黒川村青年学校『黒川学園叢書 14 号』
昭和 11 年 3 月、p.62

参考文献、参考資料、ホームページ

- 大霞会／編『内務省史（第 3 巻）』（財）地方財務協会、昭和 46 年
- 大霞会『内務省外史』（財）地方財務協会、昭和 52 年
- 『紫明（第 3 号）』山形県東田川郡黒川小学校綴方研究部、昭和 6 年
- 『紫明（第 7 号）』山形県東田川郡黒川尋常高等小学校、昭和 10 年
- 『鹿苑（第 2 号）』黒川村青年団、昭和 3 年
- 『鹿苑（第 3 号）』黒川村青年団・女子青年団、昭和 7 年
- 『鹿苑（第 4 号）』黒川村青年団・女子青年団、昭和 11 年
- 『鹿苑（第 6 号）』黒川村青年団・女子青年団、昭和 12 年
- 『鹿苑（第 7 号）』黒川村青年団・女子青年団、昭和 13 年
- 『道路愛護文集』山形県東田川郡黒川尋常高等小学校、昭和 11 年
- 『櫛引町郷土教育資料』櫛引町学校教育研究所編、昭和 42 年
- 『黒川学校の百年』櫛引町立櫛引東小学校創立百周年記念事業実行委員会、昭和 49 年
- 『山添学校から百年』櫛引町立櫛引西小学校創立百周年記念事業実行委員会、昭和 51 年
- 『櫛引町誕生 50 周年記念誌「時空をこえて」—新たな伝統を育んだ半世紀の栄光と苦悩—』櫛引町、平成 16 年
- 『庄内の道』建設省東北地方整備局酒田工事事務所、昭和 60 年
- 社団法人土木学会 <http://www.jsce.or.jp/index.html>